

コマンド・ガールズ 6

ケネス・ハートフォードの映画「HELL SQUAD」より



—— 冷戦時代から中東は当時から世界の火薬庫だった。

ン連の後押しを受けたテロリストたちと、西側と同盟する勢力とが、砂漠のあちこちで衝突していた。

テロリストの一味が、米国大使の子息を誘拐する事件は、そんな最中に起こった。

テロリストの要求に屈すれば、世界は破滅へと向かうことは明らかだったが、だが、悪が栄えた試しはない。

世界最強の美女たちが、

邪悪な企てを阻止すべく立ち上がるはずだった。

登場人物

ジャン

27歳。元CIA。身長174センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。

ティナ

25歳。いちばんの長身で180センチ。北欧系の端正な美女。ちょっと皮肉屋だが冷静なリーダー格。

モーリーン

25歳。ショートカット。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼。身長は178センチ

リサ

20歳。赤毛。十三歳で家出。パンク歌手のような鋭い顔つきに、油断のない向上心に溢れた眼。

ローレン

21歳。東部の出身。マサチューセッツ工科大学中退。典型的なワスプ顔で教養がある。

キャシー

18歳。カンザス出身。田舎くさく、白い肌にちよつとだけソバカスが残る。1メートルを越える、いちばんの巨乳。



「君たちのおかげで息子が戻ってきた」

アメリカ大使館。

大使は目に涙を浮かべて、ジャックに付き添われて現れた美女たちを出迎えた。

「感謝する。いや、どう感謝してもしきれない」

「任務を果たしただけですわ、閣下」

ジャンが微笑んだ。

「ご息はワシントンに送られ、手当てを受ける手はずです」
ジャックが説明した。

「外傷はありませんでした。一週間も静養すれば元気になるでしょう」

大使は何度も頷き、傍らに控えるブルーのスーツの美しい女秘書を振り返った。

「ソフィア。例のものを持ってきてくれ」

浅黒い肌をしたトルコ系の秘書は頷き、奥の部屋へと消えた。

「皆さんには、政府から約束どおりの報酬が支払われるだろう。だが、私からも個人的にお礼をしたい。いま、ソフィアに運ばせる」

大使はそう言い、目を閉じた。

「無事、息子は戻ってきた。われわれは彼らの要求に屈しなかった。世界は君たちによって救われたようなものだ」

「世界を救った英雄には」

ティナが悪戯っぽく笑った。

「じゅうぶんなボーナスを下さいな」

美女たちも、二人の男もいつせいに笑った。

「いえ、閣下」

ジャンだけが真顔のままだった。

「事件はまだ終わってはいませんわ」

「なんだって、ジャン」

ジャックが眉を顰めた。

「閣下のご息は取り戻した。首謀者のシークの一派は壊滅した。これ以上、何か問題が残っているというのか」

「ええ、そうよ」

ジャンは答えた。ティナが袖を引いた。

「ちよっと、ジャン」

「ティナ、覚えてる？ 私たちはホテルで毎日のように出勤命令を受けたわ。その都度、大勢のアラブ人を殺したけれど、テロリストは一人もいなかった。やっとテロリストにお目にかかったのは、ホテルを襲撃されて、シークの別荘に連行された時よ。その出勤命令は、誰が出したの？」

大使とジャックは顔を見合わせた。ジャンは声を潜めた。

「大使館内に裏切り者がいます。私たちは、裏切り者のニセ命令に踊らされていたんです」

「まさか！」

大使は大声をあげた。

「そんな馬鹿なことがあるか。私の部下たちは、みな、合衆国に忠誠を誓っている。信頼のできる者ばかりだ」

「一人を除いてはそのとおりでしょう。でも、裏切り者がいたのは事実です。いま、それを証明してごらんにいます」

「ドアが開いた。秘書のソフィアが入ってきた。手に、包装紙に覆われた箱を六つ、抱えている。閣下、お持ちしました」

ジャンはくるりと踵を返し、ツカツカとソフィアに近づくと、いきなり、彼女のスカートの下に手を差し入れ、股間をぎゅゅとつかんだ。

ソフィアは悲鳴をあげ、箱を取り落とした。

「ジャン！」

ジャックが叫んだ。

「何をするんだ！」

「見て、彼女の表情を」

ジャンが応じた。ソフィアは、ぎゅゅと目を閉じ、顔を苦痛に歪め、腰を折り曲げて悶絶している。

「女が、こんなに苦しみ悶えるはずがないわ！」

言うなり、ジャンはソフィアの股間から手を離し、彼女が両手で股間を庇う寸前に、膝蹴りを同じ箇所に着せさせた。ソフィアは絶叫し、床に転がって七転八倒した。

「みんな、こいつを取り押さえて！」

美女たちはソフィアに飛び掛かった。

「そいつのパンティを脱がせて、閣下にお見せするのよ！」

美女たちは、ソフィアの両脚を押さえつけ、下半身を剥き出しにした。

赤黒く腫れ上がったペニスと、皮に覆われた貧弱なペニスが顔を出した。

「なんてことだ……」

大使は呻いた。

「男だったなんて……」

ジャンはソフィアの髪の毛をつかみ、ぐいと引っ張った。カツラが脱げ、浅黒いアラブ男の顔が飛び出した。

「こいつが、ニセの命令を出してたわけ？」

モーリーンがジャンに訊ねた。

「そう。たぶん、こういうこと。この国の軍隊は、軍隊とは名ばかり、軍閥のボスが幾つにも分かれて私兵を養い、争い合っているのが現状よ。大使の息子さんを誘拐したシークもボスの一人なんだわ。こいつはシークのライバルの誰かの手先で、この事件を利用し、私たちにニセの出勤命令を出してシークの部下たちを襲撃させ、彼の勢力を削ごうとした。もし、私たちが襲撃に失敗し全滅しても、彼らの損にはならないしね」

「とんでもない奴ね！」

リサが憤慨した。ローレンも同意した。

「私たちに大勢の同胞を殺させるなんて！」

「ふん！」

アラブ男は不敵に呻いた。

「帝国主義の手先め……呪われるがいい！」

「お黙り。スパイのくせに」

ジャンは男に歩み寄り、じつと腫れ上がった陰囊を見つめた。

「ここまで男だということを隠し通したのは見事だったけど、いつかは悪事は露顕するものよ。それともいっそ、女にしてあげましょうか？」

男の表情が変わった。ジャンは無言で、パンプスの踵で男の陰囊を踏みつけ、踏みにじった。

ぐしゃっと肉の弾ける音が響いた。

男は大きく体を痙攣させ、血反吐を吐いて白目を剥き、仰向けに倒れた。

大使は受話器を取り上げ、「三人ほど、ここに寄越せ」と命じた。大使館付きのアメリカ兵が三名、部屋に入ってきた。

「運び出せ」

鞆丸を踏み潰された男は、あつという間に運び出された。

「やれやれ、君には感謝してもしきれない」

大使は首を振りながら、ジャンに握手を求めた。

「しかし、よく女装を見抜いたわね」

ティナが訊ねた。ジャンは微笑んで説明した。

「最初にここに来たとき、トイレに入ったの。ちようど、ソフィアと入れ違いだった。便器を見たら、蓋が上がってたの」

美女たちは互いに顔を見合せ、なんだ、そうか、と納得顔で頷きあった。大使とジャックだけがきよんとした顔をしている。ジャンは重ねて説明した。

「用を足すとき、蓋を上げるのは男だけよ。女性用トイレでは、ありえないことなの」

「みごとだ、ジャン」

ジャックは、ジャンの肩に手を置いた。

「アメリカ合衆国政府を代表し、あらためて礼を言うよ。こいつを放置しておいたら、また危機の火種がひとつ増えるところだった」

「お礼の言葉なんかより」

ジャンは微笑み、ジャックの股間をそつと触れた。

「ポーナスを二割り増しするよう、政府に掛け合ってくれないかしら」

(おわり)